筆者の文章を評価する説明文の授業

－第５学年「言葉と気持ち」の実践を通して－

谷　　栄　次

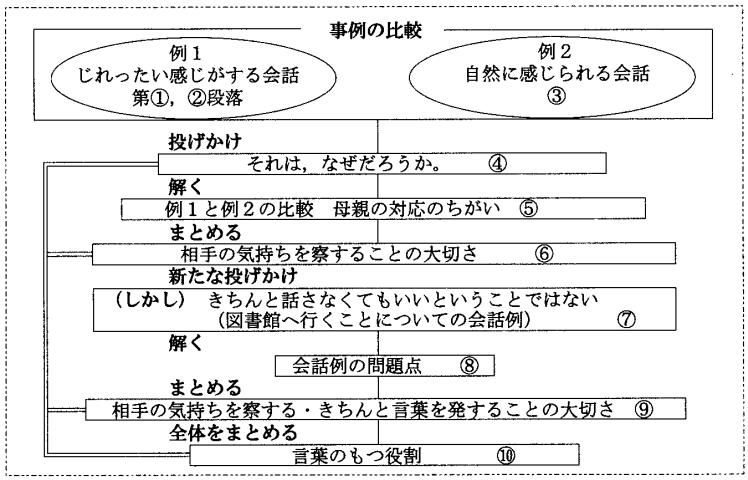
１．はじめに

これまで説明文の読みの学習において，「形式主義」「内容主義」と名付けられる指導の在り方が大きな問題となってきた。阿部昇氏は，「いずれも，読解指導において最終的に求められるべき文章の吟味・批判・書き換えの力を育てるという創造的な要素が大きく欠落するものとなっている[1)]」と述べている。また，森田信義氏も，「従来説明的文章の読みは，何がどのように書いてあるかを，叙述に即して確認することが中心であったと言ってもよい。もっとも，書いてあること，書き表し方をありのままに理解しようとする行為そのものはけして避難されるべきことではない。それに留まることに問題があったのである[2)]」とし，筆者の工夫を評価する読みを提唱している。

こうした考えを踏まえ，本稿では，説明文「言葉と気持ち」の実践を通して，筆者の文章に対する子どもたちの評価を具体的に述べ，授業の在り方について考察していく。

２．教材文「言葉と気持ち」（光村図書５年下）について

本教材「言葉と気持ち」は，言語そのもののはたらきに焦点を当てた文章である。筆者は，言語の表面的なものとその裏に潜む意図や気持ちの両方を意識することがコミュニケーションにとって必要なことだと訴えている。



説明の論理展開をまとめると右のようになる。書き出しは，前置きをしないで具体的な事例（例１の会話）を提示し，読み手にその問題点を考えさせる工夫がなされている。その問題点を浮き立たすために，例２の会話や一般的に起こりうる会話の例をあげ，読者の理解を助ける工夫へとつながっている。したがって，本教材は，事例を効果的に使うことによって筆者が述べたいことを分かりやすく読者に説き明かすことが最大の特徴といえる。

３．研究仮説の設定と単元構成

(1)　研究仮説の設定

上記に述べた本教材の特性を踏まえて，次のような研究仮説を設定した。

> 書かれている内容を読み取った後，筆者の説明の進め方や書き表し方に対して，「分かりやすい」「問題がある」という立場で，吟味する話し合いの場を設定する。こうした文章を評価する活動を取り入れることによって，文章をより深く見つめ，論理的な思考力をつけていくことができるだろう。

⑵　単元構成

本単元の最終的なねらいは，筆者の文章を評価することにある。評価するためには，まず筆者の文章を正確に理解することが必要である。そこで，文章に対する構えをつくる段階と筆者の文章の内容と工夫について読み取る段階を設けることにする。

単元名　　筆者と対話しよう『言葉と気持ち』（９時間）

単元のねらい

○三つの会話例の取り上げ方や説明の進め方について，筆者の工夫を理解することができる。

○筆者の工夫に対して，自分なりの考えをもち，意見交流することができる。

第一次　読みの構えをつくる段階（３時間）

○題名読みをし，自分の思いをもつ。（教材文への読みの喚起）

○全文を通読する。（教材文への抵抗感の排除）

○学習計画を立てる。（教材文への切り込み口の設定）

第二次　筆者の説明している内容と工夫について読む段階（３時間）

○例１と例２を示した筆者の意図を読み取る。

○図書館へ行くことについての会話を示した筆者の意図を読み取る。

○文章全体から筆者の言いたいことを考え，文章の構造に目を向ける。

第三次　筆者の文章について評価する段階（３時間）

○第二次の学習を生かして，筆者の説明の進め方や述べ方について，自分なりの意見や感想を書く。

○意見や感想の交流を図り，筆者の説明に対する自分の思いを深めたり，広げたりする。

○日常の生活での言葉について考え，学習をふりかえる。

４．授業の実際

⑴　第一次　読みの構えをつくる段階（教材文への読みの喚起）

「言葉と気持ち」というテーマで，原稿用紙一枚程度で文章を書く活動を取り入れた。それは，これから学習する筆者の文章の内容に対する意識づけができると考えたからである。書く時点では，筆者の文章にまだふれていないが，経験した会話や想像の会話など具体的な例を述べて結論づけるものが多かった。大きく分類すると次のようになる。

A．言葉によって受け手の気持ちが変わる　17名

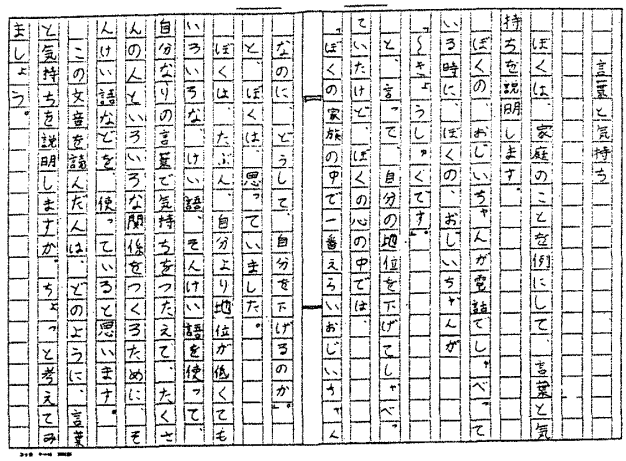
B．送り手の気持ちや配慮が必要になる　6名

C．AとBの両方　5名

D．言葉を口に出さない方がよい場合もある　3名

E．言葉と気持ちのかかわりや結びつき　5名

F．その他（立場により言葉がちがう，自分自身に目を向けて）　4名



－B　言葉は，送り手の気持ちや配慮が必要になる－

⑵　第二次　　筆者の説明している内容と工夫について読む段階

①　図書館へ行くことについての会話を示した筆者の意図を読み取る

教材文の特性から第一次での初発の感想も例について書いたものが多かった。

○比べることで分かりやすい
○会話と説明が交互で読みやすい
○日常的な会話例で考えやすい
　（読み手のための文章になっている）

そこで「筆者はなぜ具体的な会話例を出したのだろう」という学習課題を設定した。第二次は，何がどのように書かれているのかを文章に即して読み取ること段階である。ここで，文章を的確に理解しなければ，評価することも難しくなる。

例１と例２は，相手の気持ちを察することの大切さを浮き彫りにするためであり，それを受けて図書館へ行くことについての会話例は，きちんと言葉を発することの大切さを浮き彫りにするためのものであることを読み取ることができた。

授業の展開

1．本時の学習場面を確認するために音読する（一人読み）
2．学習課題について考える
　「筆者はなぜ具体的な会話例（図書館についての会話）を出したのだろう」
3．事例だけを音読する（役割読み）
4．図書館の会話についての会話を出すことで筆者は何を言おうとしているのかを読み取る
5．４をもとに会話例の原因を話し合う。
　（前日どんな会話がなされたかが書いていないことについて）
6．会話例のような経験を話し合う
7．課題に対するまとめをノートに書く

４で出された子どもたちの考え

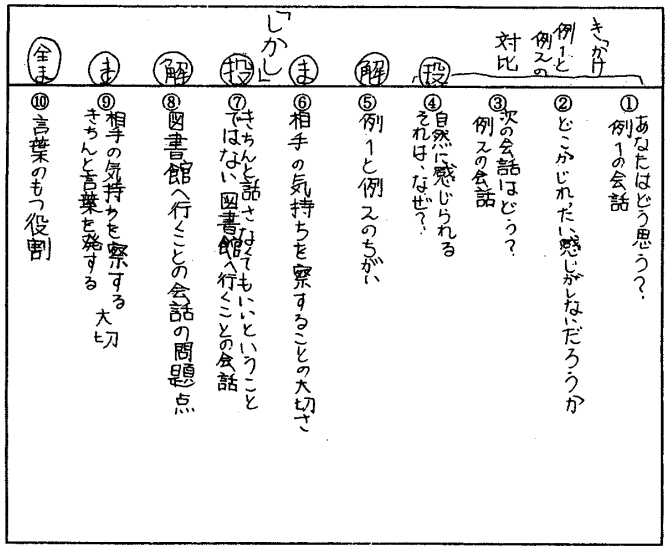
●人に頼らないようにすること（ちゃんと話すこと）
●相手に期待しすぎると失敗すること
●相手が分かるだろうと勝手に思いこむと失敗すること
●いつでも相手に伝わると思ったらだめだということ
●例１と例２で気持ちを察することの大切さを言っているので，この例では，きちんと言葉を発することが大切だということ
●気持ちを察することと言葉を発することで，人と人とのつながりを大切だということ
●日常の生活の中でありそうな会話をあげて，みんなにも似たような経験がないかを聞くため

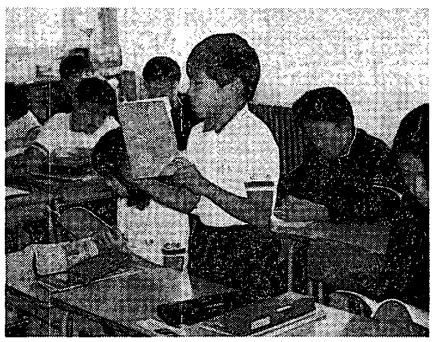
②　文章全体から筆者の言いたいことを考え，文章の構造に目を向ける

ここでは，文章全体に目を向け，どのように説明を進めているのかという筆者の論理展開を読み取ることが目的である。そのために，「問題を投げかける」「解く」「まとめる」という「くくりの言葉」を使って文章を捉え直す活動を取り入れる。そうした活動を通して文と文とのつながりや段落どうしの関係を考えることになる。また，接続語のもつ意味や重要性に気づくこともできた。

授業の展開

1．全文を通して読む。
2．文章構成を考える。
　ア　筆者の一番言いたいことを考える。
　イ　短冊に書いてあるキーワードと形式段落を結びつけ，順番を考える。
3．「問題を投げかける」「解く」「まとめる」の仲間分けを考える。
　（例１と例２の対比，⑨と⑩のまとめのちがいの２点について考える）
4．プリントにまとめる。





⑶ 第三次　筆者の文章について評価する段階

子どもたちが筆者の文章を評価するとき，文章の内容，説明の進め方，書き表し方の３点が具体的な視点として考えられる。教材文の特性とこれまでの学習から次のような視点で評価することにした。

●書き出しの工夫について	ア．いきなり例を投げかけることについて
●事例を挙げて説明したことについて	イ．例１と例２について
	ウ．図書館の会話例について
●使われている言葉の表現について	エ．使われている語句や語法について

話し合いを深めるためには，筆者の工夫に対する考えをもつための時間を十分に保障し，その根拠を文章の中から見つけることが大前提にある。それらをもとに考えを分類し，話し合いの組み立てに生かしていく必要がある。

筆者の工夫に対する子どもたちの評価　　☆は，取り上げて話し合った評価の相違点

筆者の工夫点		分かりやすい	問題がある
ア	いきなり例を投げかける書き出しについて	・読み手が何だろうと考え，読む気にさせる ☆余計なことが書いてない方がはっきりしている ・この会話を一番に出して考えてもらいたい意図がある	・言葉と気持ちについて何も示されていないので，途中のような感じがする ☆知識がないまま問われても答えにくい
イ	例１と例２について	☆生活の中でありそうな会話があげてあって考えやすい ☆相手の気持ちを考えることが言いたいのだから，例１の女の子は甘えにはならない ・わざとじれったい会話をつくっている所がよい ・母親の言葉を比べることで気持ちを察することが大切だと分かりやすい	☆例１は現実離れの感じがする ☆例１は母親が悪いと筆者は言っているが女の子の言い方にも問題がある ・例２にも「そのジュース飲んでもいいの」「いいわよ」を入れた方が分かりやすい
ウ	図書館の会話例について	・日常にありそうな会話だから ・気軽な会話で失敗がよく分かる ☆前日の会話がかくれていて次の説明につながって分かりやすくなっている	☆前日の会話があった方が分かりやすい。何が原因だったのかが分かる
エ	使われている言葉の表現について	・投げかけの言葉がよい ・会話例の「かわいた」「なった」がふだんの言葉のようである「ところよ」は親っぽい ・まとめは「である」といった言い切りの言葉でよい ・「あまえに外ならない」「自分勝手な人だ」は説得力がある	・「察する」「対応」など難しい言葉がある「察する」を「受け取る」にした方がよい

5．考察

研究仮説である文章を評価する活動を取り入れることの効果について考察していく。

評価の★印を見ても分かるように，考え方が分かれている。それぞれの考え方を比べることで，幅広く文章をとらえることができた。また，その根拠を叙述に求めることで，より深い読みにつながっていった。

例えば，例１と例２についての話し合いでは，例１の女の子の会話の在り方に対して活発に意見が出された。『のどがかわいた』は私たちでも自然に出る言葉だから甘えではないという考え方は，筆者の意図をくみ取った深い読み取りと考える。

図書館の会話例でも，前日の会話がないことについて様々な考えが出されたが，「『だから，いっしょに行こう』とは言わなかったわ」の部分に，筆者は前日の会話の問題点も含ませている意図があることに気づくことができた。

書き出しについては，意見が収束する方向に向かうことはなかったが，いきなり投げかけることはどんなよさがあるのかを明確にすることができた。「こういう点ではこの工夫よい」「こういう点では問題がある」と整理し位置づけることで，様々な角度から文章にふれることができる。これは，文章をより深く見つめ，論理的な思考力を身につけていくことにもなり，研究仮説の検証するものとしてとらえている。

論理的に考えていくことの楽しさを見出すために，さらに次の２点について考えていきたい。

○子どもたちの生活の文脈と結び，「こういうときこんな言い方をするとこうだった」などを根拠にして判断する。
○これまで学習してきた説明文の事例の展開を想起し，比べて判断する。

6．おわりに

情報があふれている現在，その情報の向こうにある伝える側の意図を的確に理解し受け入れる力を身につけていく必要がある。筆者の文章を評価するといった「吟味する」「批判する」といった活動は，そうした意味においても重要になってくるであろう。

さらに様々な文章にふれることを通して，正確に理解する力を培うとともに，「自分はこう思う」「このことは納得がいかない」「同じ内容を言うのならもっとこういう説明の仕方をするべきだ」などの感じ方や見方を豊かなものにしていきたい。

【引用文献】
1）阿部昇，『「吟味」「批判」方法の体系化と「読み」から「書き」への発展を』，「国語教育　戦後国語教育研究の到達点と課題」，明治図書，1996，７，pp.88-92.
2）森田信義，「筆者の工夫を評価する説明的文章の指導」，明治図書，1989，pp.41-42.
【参考文献】
森田信義，「説明的文章教育の目標と内容－何を，なぜ教えるのか－」，渓水社，1998.